

坂に見し街へ入りゆく秋の暮

藤田湘子

「街へ入りゆく」に小さな驚きがあつた。普通なら「街に行く」である。

今しも丘陵地帯から見下ろした東京都心へと電車が進んでいる。時節は秋の暮。詩心とは、ほんの小さなころの動きの中にも潜んでいるようだ。

また、その街は、信州の小さな街であつたかも知れない。友人達と近くの山に登つた吟行の帰り道など。

たつた一句の俳句では、その背景をつぶさに知ることもかなわない。だからこそ「坂に見し」と「街へ入りゆく」が面白い。俳句らしくらず動詞が重ねられ、時間の経過が詠われ、幕を下ろすように季語「秋の暮」が、日本の伝統文化そのものとしての情緒を掻き立てる。

1950年（25歳）第一句集『途上』 鑑賞・轍郁摩